

特集

季節の実りをいただく
収穫のたのしみ

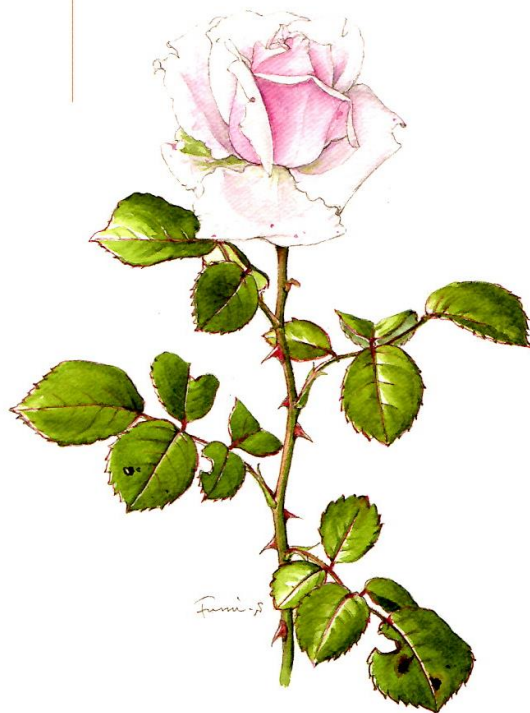
イシノマキ・ファーム(石巻市北上町)
デリシャスファーム(大崎市鹿島台)
赤坂農園(東松島市大塩)
パストラル縁の郷(大郷町東成田)
JRフルーツパーク仙台あらはま(若林区荒浜)
ざおうハーブ(蔵王町大字矢附)

7

バラ(西部農産にて)

工房近くにある農産物直売所 山形西部農産の生垣に、初夏から咲き続けている可愛いバラ。教室のモデルにと快く剪ってくださった。残念ながらバラの名前はわからないとのこと。

杉崎文子・画



カラダがよるこぶ

夏の食卓

栄養バランスのとれた食事をつくらう
スパイシーパンケーキ
香味しらす丼/麻葉卵と蒸し鶏の素麺
甘酒のブランマンジェ/自家製クラフトコーラ/ウイークエンドシトロン
マグロカツ

21

人物の話題

りらくインタビュー
日本雁を保護する会会長

呉地 正行

顔語り

県民共済サービス株式会社代表取締役

遠藤 正敏

思い出写真館

川崎町町長 仙南地方町村会会長

元川崎町青年団長

小山 修作

40

44

86



蒸留器を使った蒸留体験も
ショップのご予約はコチラ▶



プラスナチュラリー

そこは、東北、宮城の自然と香りが
織りなす小さな空間。

「自然と共に暮らす」がコンセプトのお店で
あなたの24時間にほんの少しの自然を。



+Naturally (プラスナチュラリー)

宮城県仙台市青葉区二日町17-22 TNER304

TEL:050-3395-1832

Open 11:00 - Close 18:00 [予約制・不定休]

運営:(株)グリーディー

※北四番丁駅から徒歩3分/お車でお越しの際は近隣のコインパーキングをご利用下さい。

呉地 正行

日本雁を保護する会 会長



長年渡り鳥とその生息地の保護・保全・復元活動や環境整備などに従事し、今年6月、国際的に重要な湿地保全に貢献した各国の個人・団体・政府に贈られるラムサール賞と、日本国内で鳥類の研究や保護に業績を上げた個人、団体に贈られる山階芳麿賞をダブル受賞

呉地 正行(くれち まさゆき)

1949年、神奈川県生まれ。東北大学に進学し、仙台に移住。訪れた伊豆沼でガンと遭遇し、そのとりこになる。1970年代からガンの調査をはじめ、渡りの経路解明や生息環境の保全・復元に取り組む。世界の研究者とのネットワークを持ち、国内外の「鴈友」とともにシジュウカラガンの復活活動に深く関わる。現在は保護団体「日本雁を保護する会」会長、「NPO法人ラムサール・ネットワーク日本」理事、NPO法人「無栗ぬまっこくらぶ」理事長などを務める。栗原市在住。

インタビューのかたわらで、希少な「蝶蜻蛉」がヒリヒラと飛んでいる。ラムサール条約湿地に登録されている大崎市の「無栗沼・周辺水田」。世界で初めてその名称に水田が明記された登録地には、秋の深まりとともに、多くの渡り鳥がやってくる。「日本雁を保護する会」の会長を務める呉地正行さんは、長年、国内外の関係者とともに渡り鳥の保護支援に取り組んできた。

今年6月、ラムサール賞のワイズユース部門と山階芳麿賞をダブル受賞した呉地さんに、無栗沼での活動やシジュウカラガンとの関わりなどについてお話を伺った。

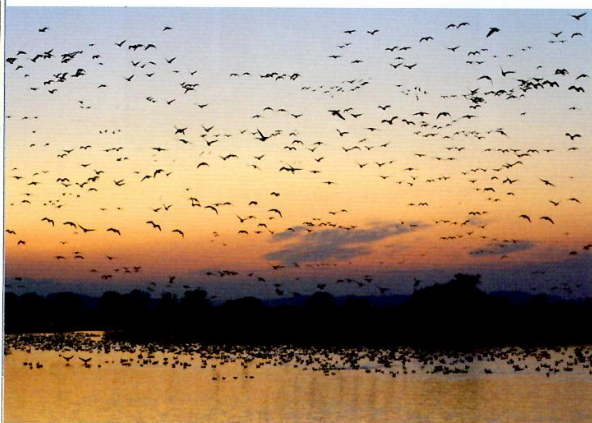
「ダブル受賞、おめでとーございます。率直なお気持ちを聞かせください。」
両方とも大きな賞で、受賞できたことに驚いています。絶滅寸前だったガンの保護に携わって50年。湿地の管理者、農家、自治体などと知恵を絞りながら取り組んだ活動が評価され、素直にうれしく思っています。

「ラムサール賞は「ワイズユース(湿地の賢明な利用)部門」での受賞です。」

ラムサール条約の「湿地の賢明な利用」とは、「湿地の生態系を維持しながら、そこから得られる恵みを持続的に活用すること」であり、条約の肝の部分に関わる賞を受賞できたことは、非常に荣誉と意義のあること

ラムサール賞：長年にわたり湿地の保全と持続可能な利用に多大な貢献をした個人や団体を讃える賞。1996年に創設され、現在は「湿地のワイズユース」「湿地のインベーション」「ヤングチャンピオン」の3つの部門から構成されている。

山階芳麿賞：日本国内で鳥類の研究や保護に業績を上げた個人、団体に贈られる賞。賞の名称は、山階鳥類研究所の創立者・山階芳麿博士の功績を記念してのもの。



ガンのねぐら入り。夕日が沈み始める頃、日中近くの田んぼで過ごしたガンたちが沼に戻ってくる(大崎市蕪栗沼/撮影・戸島潤)

※「大崎耕土 世界農業遺産」ホームページでガンのねぐら入りの映像公開中 (<https://osakikoudo.jp/>)

国境も時も越えて、人の思いがつかないだ50年 「見上げればシジュウカラガンのいる」風景を夢見て 多様な生きもので賑わう湿地や田んぼを守る

だと喜んでいきます。

ラムサール条約の「ラムサール」とは条約が締結された場所の地名で、その名称自体にメッセーシ性はありません。登録地には豊かな湿地環境がありますが、宝の中には人には宝が見えないように、そこで生まれ育った人たちは、その湿地に価値があると言わなくても、それだけでは心に届きません。

大事なことは、地域の人たちが身のまわりの風景を「すごく価値があるんだ」というまなざしで見えるようになること。登録自体をゴールに掲げて活動しているところもありますが、我々はその地域の人たちのまなざしを変えることが重要だと考えています。

— 受賞理由には、湿地での持続可能な農業との共生に貢献したことも挙げられています。

田んぼは、稲を栽培するための農地です。

アジア共通の文化ですが、田んぼが他の農地と異なるのは、稲のために水が張られ、湿地機能を保つ点です。この機能を適切に管理すると、田んぼはドジョウやタニシなど多様な生きものを育み、ご飯もおかずも得られる場所になります。何千年も稲を育てても、畑作のような連作障害は起きません。田んぼにはこうしたすごい力があるのですが、これは水の力のおかげです。

ところが、田んぼの文化を持たない欧米では、「田んぼは生きものの住処ではない」と考える人が圧倒的に多く、生きものが育つ豊かな田んぼという発想自体がありませんでした。

ラムサール条約は3年ごとに締結国の会議が行われています。「蕪栗沼・周辺水田」は2005年の会議のときに条約湿地に登録されましたが、その次の開催地は韓国の昌原(チャソン)でした。その会議がアジアを特徴づける水田決議を採択するチャンスだと思い、私自身も起草段階から関わり、日韓両国のNGOや政府と一緒に決議案を作り上げました。

それが、第10回ラムサール条約締結国会議で採択された決議X.31「湿地システムとしての水田の生物多様性の向上」です。水田を重要な湿地生態系と認識し、農業の実践を通じて、生物多様性を保全できることを示すことができました。田んぼについての国際的なまなざしを変える大きな出来事でした。

— 大崎市の蕪栗沼の活動も特筆すべきところがありますね。

水田決議のきっかけとなったのが、蕪栗沼での取り組みです。

ガンはかつて日本人なじみ深い鳥でした。日本最古の歌集『万葉集』にはガンの歌が66首もあり、ホトトギスに次いで二番目に多く詠まれています。

しかし、ガンの数は数千羽、生息地は数十までに激減し、その多くが伊豆沼・内沼に集中するようになりました。その後1971年にすべてのガン類が保護されると、やがて数が増え、とくに伊豆沼・内沼のガンが著しく増加しました。そこで、問題となったのが「ガンは害鳥」と考える農家との軋轢です。私たちは伊豆沼から10キロほど離れた蕪栗沼への分散化を提案し、国や県が対応しましたが、地元農家の合意を得られず、計画は頓挫しました。

昼間、ガンは田んぼで採食しています。ガンは主に落穂や草を食べるのですが、昔は刈っ



エカルマ島での最後の放鳥 (2010年9月)



栗原市の水田で初めて発見された放鳥シジュウカラガンの家族群 (2007年11月25日 撮影・瓜生鳥)。白いほおの模様と首のリングが特徴のシジュウカラガン。左側の4羽の親鳥には、放鳥の証となる色足輪がついている



初めての日米ロシジュウカラガン回復チーム会議 (1992年1月 米国カリフォルニア州)

米価も右肩上がりの時代ではなくなっていました。食害に対しては、町が「食害補償条例」を制定し、農家のガンに対するまなごしは「害鳥」から「農家に役立つ自然資源」へと変わりました。農家が恩恵を見出し、ガンにとっても住みやすい場所を提供する。

まず、地域で影響力のある農家に会って、相手の考えを聞きだし、本音で話ができる環境を作っていました。立場は違うけれど、ひとつの沼と地域にはひとつの未来しかありません。そこで、田んぼにガンがいる意味をもう一度考えてみよう、提案しました。ガンは環境に敏感な鳥です。ガンがいるということとは、この地域の田んぼに、ほかで失われてしまった豊かさが残っているということ。ここで育ったお米はガンに選ばれた田んぼでとれたお米なんだ。そういう物語をお米と一緒に販売すれば、被害の何十倍も大きい価値を生み出すことができます。

「どのように合意を目指したのですか。」
東ねた稲を田んぼで乾燥させる方法が多く、ときにその乾燥中の粉を食べてしまう。それで、農家にとっては害鳥になっていたのです。けれど、ガンが越冬するためには、安全なねぐらとなる湖沼と、採食地となる広い田んぼの両方が必要です。蕪栗沼への分散化を実現するためには、「人が大事か、鳥が大事か」という大きな課題があって、そこを解決できるかどうか、一番大きな問題でした。



水田決議の時には日本政府とも協議を重ねた。「立ち位置が違うのでぶつかることも多いですが、ゴールを共有することによって、その途中で起きた問題について一緒に考え解決することができました。その過程がとても有意義で、今後に向けての財産になりました」

「冬も田んぼに水を張る「ふゆみずたんぼ」は広く知られるようになりました。」
屋間の採食地とともに、ねぐらの分散・拡大も大きな課題でした。ねぐらとして利用できる多くの湖沼が、干拓で消滅してしまっただけです。そこで、水田を湿地に戻した蕪栗沼での取り組みにヒントを得て、関心のある農家に呼びかけ、冬の田んぼに水を張る取り組みを始めました。これは、「冬季湛水」農法と呼ばれ、冬の間も田んぼに水を張り、無農薬、無化学

「強い味方になる」こと。農家の有力者の方々が考えを変えると、地域のほかの農家の方々にも話を伝えてくれました。そのなかで、キーワードとなったのが「ふゆみずたんぼ」でした。
「冬も田んぼに水を張る「ふゆみずたんぼ」は広く知られるようになりました。」
屋間の採食地とともに、ねぐらの分散・拡大も大きな課題でした。ねぐらとして利用できる多くの湖沼が、干拓で消滅してしまっただけです。そこで、水田を湿地に戻した蕪栗沼での取り組みにヒントを得て、関心のある農家に呼びかけ、冬の田んぼに水を張る取り組みを始めました。これは、「冬季湛水」農法と呼ばれ、冬の間も田んぼに水を張り、無農薬、無化学

かつてシジュウカラガンの数が激減した原因は、世界的な毛皮ブームでした。1937年当時、キツネの襟巻はサラリーマンの初任給の1年分以上の値段でした。そこで、20世紀初頭、日本政府はシジュウカラガンの繁殖地である千島列島で養狐事業を始めます。島に放たれたキツネはシジュウカラガンを大量に捕食し、やがて日本への渡りもなくなり、

「一度は絶滅したかに思われたシジュウカラガンの復活にも力を尽くしてこられました。」
「ふゆみずたんぼ」はガンを含めて、多様な生きものを支える底力になっています。



ふゆみずたんぼに集まったハクチョウの群れ (大崎市北小塩地区/撮影・岩瀨成紀)

肥料で米作りを行います。その後の調査で、冬に水を張ると、夏も微生物からサギなどの鳥類までさまざまな生きもので賑わう田んぼになることがわかりました。

2018年1月25日に仙台市東部上空で83年ぶりに観察された77羽のシジュウカラガンの群れ(一部/撮影・新野聡)



繁殖地の島々からも姿を消しました。

その後、アリューシャン列島の島のひとつで再発見されたシジュウカラガンの保護回復活動が米国で始まり、日本でも米国の協力を得て保護の取り組みが始まりました。

1982年、八木山動物公園にシジュウカラガンの繁殖施設ができ、2年後、初めてのヒナが誕生し、越冬地での放鳥による野生復帰事業が始まりました。しかし北への渡りをさせることはできず、繁殖地での放鳥が必要になりました。

そこで、ロシアの研究者に協力を要請し、日米ロの共同チームを結成。1992年以降

シジュウカラガンの親鳥を米国や八木山からカムチャツカに送り、そこで生まれた若鳥をヘリコプターで千島列島の中部に位置するエカルマ島に運び、1995年に放鳥し始めました。その後、日本への渡りが復活。2007年には幼鳥をつれた家族群が日本に飛来し、野生での繁殖が確認されています。日本への飛来数は年々増え続け、約1万羽になりました。

—何がプロジェクト成功のポイントでしたか？

人の思いでしょうね。

日本にも、米国にも、ロシアにも同じ思いを持っている人がいました。政治的なことを考えると難しいこともありますが、国境を自由に越えて飛ぶ鳥が、そういう人たちをつないでくれたんです。

例えば、エカルマ島での放鳥では、長期にわたり仙台市の八木山動物公園が資金人材面で支援し、大きな役割を果たしました。その原点は、当時の島野武市長の英断でした。島野市長と「日本雁を保護する会」の初代会長である横田義雄は旧制高校のときの親友です。気持ちだけではどうにもならないことを、こうした理解者が助けてくれました。

ロシアにはガン類保護の第一人者ニコライ・ゲラシモフがいました。彼は自力でシジュウカラガンの増殖施設を建設し、その一角に妻のアーラと住みながら、20年にわたり施設の維持管理や放鳥準備を担ってくれました。お金はありませんでしたが、気持ちだけは150%。彼にもカムチャツカで事業をしている友人がいて、施設を作る場所や資材などを全て支援してくれました。

長期にわたるプロジェクトでは、強い思いをぶれずにきちんと伝え続けていくことが大事です。必ず道はあります。うまくいかないときでも、夢を持ち続けられるかどうかということですね。

—最後に今後に向けてお話しください。

我が家では、冬はガンの声で目覚めます。

目覚ましはいりません。自分はなんて良いところに住んでいるんだろうと思います。

私たちの願いは、かつてのシジュウカラガンの故郷にその姿を蘇らせることです。そこで、日本のシジュウカラガンの故郷はどこか、と考えました。

1935年頃まで、仙台市と多賀城市にまたがる七北田川下流域の「七北田低地」は、たくさんさんのシジュウカラガンが見られる最大の越冬地でした。「日本雁を保護する会」誕生の地の仙台市福田町もそこにあります。共通の故郷にこのガンとともに舞い戻ることが次の目標ですね。

2021年1月、86年ぶりにシジュウカラガンが七北田低地に飛来しました。かつてはガンのいる風景がどこにでもあったんです。そうした光景を全国に広げるため、かつての「渡り」のルート沿いに、「ふゆみずたんぼ」のようなものを作っていけば、農業としても成り立ちながら日本全体でガンのいる風景を取り戻せるのではないのでしょうか。そういう夢をみんなで見ながら、一歩ずつゴールに近づいていきたいですね。



「シジュウカラガン物語～しあわせを運ぶ渡り鳥・日本の空にふたたび!」 呉地正行+須川恒 (日本雁を保護する会) 編/発行: 京都通信社/2,970円(税込)

りらく

August 2022

定価 550円(税込)

8

夏の食卓

カラダがよろこぶ

季節の実りをいただく
収穫のたのしみ



仙台の夏を彩る星まつり

仙台の街が絢爛華麗な竹飾りに彩られる七夕まつり。
伊達政宗公の時代から脈々と継がれてきた伝統のまつりは、
いつの世も人々の心を癒し、華やぎを与えていました。

〈仙台七夕まつり〉
毎年8月6日～8日開催
8月5日夜には、前夜祭として仙台七夕花火祭を開催

仙台から 萩の月

萩の月

仙台に銘菓あり



歴史と味の
東匠三全

広瀬通り 大町本店
仙台市青葉区大町2-14-18 ☎022(263)3000(代)

- | | | | |
|--------------|---------------|--------------|-----------------|
| エス パ ル 店 | 柴 町 店 | 三 越 百 貨 店 | 石巻イトーヨーカドーあけぼの店 |
| エスパル東館 TRAD店 | 白 石 本 町 店 | 藤 崎 百 貨 店 | イトーヨーカドーアリオ仙台泉店 |
| 吉 成 店 | 松 島 寺 町 小 路 店 | イオンモール石巻店 | 岩沼ヨークベニマル店 |
| 卸 町 本 店 | おみやげ処おおさき店 | イオンモール新利府南館店 | 《県外店》 |
| ザ・モール長町店 | 古 川 台 町 店 | イオン仙台幸町店 | 盛岡フェザン店 |
| 仙台南インター店 | 仙台駅おみやげ処1号 | イオン多賀城店 | 福島エスパル店 |
| 泉 イン タ ー 店 | 仙台駅おみやげ処3号 | イオンモール富谷店 | 山形エスパル店 |
| 大河原バイパス店 | 仙台駅おみやげ処7号 | イオンモール名取店 | |

